

Community 4 Children



地域は子どものために、子どもは地域のために

Children 4 Community

一般社団法人コミュニティ・4・チルドレン

2016 年度事業報告書

(2016 年 6 月 1 日～2017 年 5 月 31 日)



連絡先:一般社団法人コミュニティ・4・チルドレン

〒545-0021 大阪市阿倍野区阪南町1丁目45番1-302号

電話 06-6622-5645 /fax 06-6621-7139

E-mail [community\\_4\\_children@yahoo.co.jp](mailto:community_4_children@yahoo.co.jp)

## 1. NGO 支援事業

### 1-1. 海外支援事業

2016 年度は、タイ国カムクーンカムペン財団とフィリピン国 JPCOM-CARES と連携し、運営・活動を支援しました。またカンボジアの Khmer Community Development と協働で、ベトナム国境の村プレックチュレイの子ども会活動への支援を継続しました。

#### A. タイ国カムクーンカムペン財団（以下、KK 財団）支援事業

東北地方コンケン県ムアン郡サワティー行政区ノンメック村とその周辺地域で、自治体や学校との協力の元、地元の村人とともに子どもを見守るコミュニティづくりを支援しています。

##### 1. 奨学金

出稼ぎ、死別、離婚などの理由によって両親と日常的に暮らすことができず、更に生活困窮家庭の小・中・高校生（専門学校を含む）30 人に、これまで年額 6500 バーツ（約 2 万 3 千円）の就学支援を行ってきました。しかし、他の奨学金の選択肢も増え、地域の学校自体の問題や家庭の事情から、保護者、地域住民、学校、財団との連携が難しくなり、奨学金をどのように利用しているかを把握することが困難となりました。そのため今年度は新たな学生への奨学金の提供を中止し、現在の奨学生 24 人の支援を卒業まで継続しました。

##### 2. 地元文化の継承

急激に変動する社会で子どもたちが成長していくための支援活動として、自分たちのルーツである地元の文化を身に着けアイデンティティを確立していくこと、廃れゆく文化の継承者として地域の発展にも貢献していくことを目指し実施しました。

###### (1) 音楽活動



2016 年 10 月にラーマ 9 世が崩御し、音楽演奏のようなエンターテイメント活動自粛が政府により公布されました。そのため財団でも、3 か月間音を奏でる活動を自制しました。音楽活動は休止したものの、子どもたちの交流活動は継続的に行いました。

これまでの音楽活動を通じて複数の子どもたちが伝統音楽の専門学校に進学しました。専門学校生となった彼らは、週末に年少の子どもに、演奏の指導を行っています。

2016 年度から新たに小学生がこの活動に加わりました。彼らは家庭に問題を抱え、世話する大人がおらず、地元住民からも“よくない子”と言われている子たちです。学校でも地域社会でも自分に自信が持てず、問題に向き合うことから逃げていました。唯一の居場所は、年長の少年が集まる不良グループだけでした。この小学生たちが財団の活動に参加し、伝統音楽を学ぶうちに、自分の居場所を見つけ仲間を作るようになりました。音楽活動と子ども同士の交流は、子どもたちの身の安全にもつながっています。

## 演奏の練習日程

練習実施月	実施日数	参加人数(平均)	練習実施月	実施日数	参加人数(平均)
2016年6月	2日間	20	2016年12月	0日間	0
2016年7月	3日間	20	2017年1月	0日間	0
2016年8月	0日間	0	2017年2月	0日間	0
2016年9月	3日間	25	2017年3月	3日間	20
2016年10月	3日間	25	2017年4月	4日間	20
2016年11月	0日間	0	2017年5月	3日間	20

## (2) コミュニティ文化の継承

### ◆仏日夕方の読経

地元の大人たちに子どもの活動をより深く理解してもらい、子どもの見守り活動を広げるために、雨季（7月半ばから3か月間）は、雨安居と呼ばれるノンメック村寺院での仏事に子どもたちが参加しました。雨安居は、僧侶が寺院で修行に専念するもので、在家信者つまり地域の大人や年配者も月に4回（満月、半月、新月の日）を寺院で過ごします。

雨安居を通じて、参加した子どもたちと地域の大人や年配者がお互いを知る機会となりました。このような子どもたちの活動を知ってもらうことで、カムクーンカンペン財団の活動への理解が深まりました。

### ◆天然素材の洗剤作り

日常生活の家計の負担を軽くするために、地元の伝統的知識や技術を活かすことが出来ないか、村人と話し合い、灰汁を使って、香りづけのためにコブミカンの汁を入れた手作り洗剤を自分たちで作ることにしました。4人1グループに分かれ、一人30パーツを出資し、15リットルの洗剤を作りました。市販の洗剤を購入した場合、25パーツ/リットル、15リットルでは375パーツにもなりません。



この洗剤であれば月に60～100パーツが節約できます。自然由来の安全な洗剤であることに加え、家計を助けることに参加者の関心は高まったようです。

実施日	場所	活動	参加者
2016年7月19, 27日, 8月3, 28日, 9月1, 9, 16, 24日, 10月1, 9, 16日	ノンメック村村落寺院	雨安居期の寺での読経参加	ノータカイ・ノンメック村の小4から中3までの生徒、8～10人
2017年4月9日	ノンメック村日タイ交流コミュニティセンター	洗剤づくり	子ども、保護者、村人約20人

### (3) 技術・知識の習得

#### ◆アクティブ英語

実施期間；2016年6月（3日間）、7月（4日間）、8月（1日間）、9月（2日間）、10月（2日間）、11月（2日間）

初歩的な日常英会話を KK スタッフもしくはボランティアが、小学5年生から高校・専門学校生までの5～10人の子どもたちに教えるプログラムです。学校では一度解らなくなると授業についていけなくなりますが、楽しく学ぶことで勉強に関心を持つようになります。日曜日の10～12時に学びました。希望し前向きに学ぶ希望者であれば誰でも参加できることから参加者が増えています。

#### ◆進路相談会

2016年4月17日、タイ正月（4月13～15日）後、長期夏季休暇（4～5月）に、奨学生とOB/OG約15人が集まり、夏休みの過ごし方や将来の進路について語り合う場を開きました。

相談会では、すでに大学へ通学した者、就職したOB/OGに参加してもらい、自身の経験を語ってもらいました。例えば、一人の青年は、勉強したくても家庭にはお金が無く、さらに日常的に三食を満足に食べられない生活困窮状態であったこと、腹を満たすには同居する祖父が寺からご飯を恵んでもらわなければならなかったこと、住まいも村の共有地を借りて住んでいたこと、冬は毛布がなく寒くて眠れなかったことなどを語り、この状況の中で他人からの軽蔑のまなざし、ドラックなどの誘惑、貧困からどのように逃れることができたのかを年少の子どもたちに語りました。

「前進しなきゃ目的に到達することはない」「忍耐と誠実さ」「小さなことと思って恥じない。いつか大きな仕事と出会えることもある」など、経験から出てくる重い言葉とともに、そんな苦しい中でも楽しいことや好きなことなどのエピソードを話してくれました。話を聞いた子どもたちも似たような境遇であることから、自分のことのように聞き入り考えることができ、自分の将来についても真剣に考える機会を得ました。

その後、先輩後輩の間柄となりSNSなどを通じて個別に相談しているようです。

#### ◆視察・研修

他の市民団体の研修や交流事業に参加しました。

・地域を愛する子どもキャンプ 2016年8月26～28日於サコンナコン県クットバーク郡ブア村インペーン・センター 参加人数20人

青少年リーダー育成キャンプでは、他地域の学校からの参加者総勢60人と共に交流しました。青少年リーダー育成キャンプは、伝統的知識を長老から学び、現在の日常生活で利用する技術を考えるセミナーで、今回のテーマは「森から取れる竹とタイ・ブルーベリーを使った料理を作る」ことでした。現在タイの在来種ブルーベリーに着目した農民団体インペーン・グループが、果実ジュースに加工し、健康ブームによって市場も拡大しています。その取り方、加工方法を学ぶとともに、子どもたちは自分たちで考え、ジャムやスイーツを考案しました。

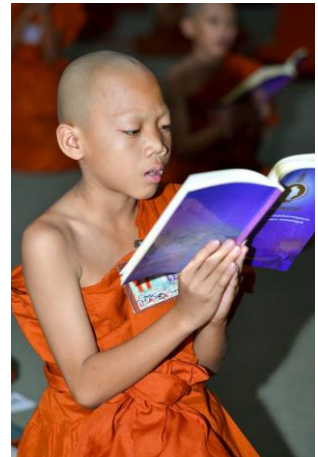
・「国際花博—御父ラーマ9世を偲ぶ」 コンケン県・市合同主催 2016年12月17日於コンケン市ブントゥンサーン公園 参加人数20人。コンケン市青少年センターなどネットワーク関係にある団体の青少年たちと交流し、展示などに参加しました。

### ◆精神修行（瞑想修行）

タイでは、仏教の教えが日常生活や人生の指針になっています。瞑想修行は、平常心を養い、様々な困難に立ち向かえる精神性を培うため、幅広い世代のタイ人が取り組みます。

若者向けに瞑想修行コースと見習僧集団出家を開催しているコンケン県ウエルワン寺とその関連施設で、子どもたちが精神修行にのぞみました。寺院で戒律を守りながら集団生活し、日頃体験できない規律を学んだ子どもたちは、短期間でも成長したようです。過去に瞑想コースを経験した子どもたちは、年少の子どもたちの世話をするボランティアとして参加しました。自主的に参加した子どもたちは寺院から信頼され期待されています。

この出家は親にとっても大切な積徳となり、忙しい保護者や遠くに住む親せきも集まって子どもの出家を祝いました。奨学生のある兄弟は、小さい頃親が離婚し、兄を母が弟を父が引き取りましたが、再婚後、祖父母や叔父に預けられ、愛情を得ることができませんでした。出家式を機に再会した父親は、これまでのことを詫び、大切な親子の愛情を認識する機会となりました。このように精神修行などの儀礼は、家族や親族が再会し親愛を深めることにもつながります。



期間	場所	参加人数	備考
2016年10月11—26日	コンケン県ウエルワン寺院	8人+6人	見習僧出家+ボランティア
11月29日	コンケン県ウエルワン寺院	20人	カチン儀礼手伝い
2017年4月18—24日	コンケン県ウエルワン寺院	1人+4人	瞑想コース参加+ボランティア
4月26—28日	コンケン県ウエルワン寺院	7人	瞑想コースボランティア

### 3. ノーンメック村子どもとコミュニティのための活動（旧・森を愛する子どもプロジェクト Dek Hak Khok）

これまでKK財団では、子どもとコミュニティの両面で活動してきましたが、子どもたちが地域を愛し、農民としての人生を愛するためにはコミュニティの力や絆が重要であると認識し、2016年度から、子どもたちが暮らすコミュニティ中心の活動に重点を置いています。村民と共に、コミュニティの基盤強化を目的に、有機農業の普及と公共林保全を開始しました。

#### （1）有機農法の普及一人と環境にやさしい農民を目指して

##### ◆子どもとコミュニティのための実験農場



KK財団理事が4ライ（約2,000坪、0.640ヘクタール）の土地を無償で提供してくれることになり、子どもたちに地域や「農」を愛する心を育てるため、村人も参加する協働の有機稲作を始めました。

ほとんどの村民は、化学肥料や農薬に頼る農業をしており、有機農法の経験はありません。ミミズがいなくなり、土地は劣化しており、環境破壊や食の安全性への不安は持っています。

8月に開催した「青少年キャンプ IN タイ」の期間中に、キャンプ参加者と村の子どもと大人とで、有機稲作の開始となる田植えを行いました。雑草取りや稲刈りなど人力が必要な時は、相互扶助力を高める意味で、かつてあった伝統の「結」の文化を復活しました。

村の有機稲作では、植える苗は一株だけです。村では通常2～4株を植えるため、不安を持つ村人もいましたが、2週間後にはしっかり根を張り順調に育っている稲を見て安心したようです。その後、ぼかし肥料（油かすや米ぬかなど有機肥料に、土やもみがらを混ぜて発酵させて作る肥料）も投入した結果、4ライの田んぼから、約1500kg（もみ殻付き）の収穫がありました。

この成果によって、村人たちの有機農法への関心は一層高まりました。

#### 稲作スケジュール

日時	活動	参加人数
2016年5月12日	耕起、堆肥づくり	20人
7月9日	苗床づくり	7-8人
8月14日	田植え	約50人（子ども、ノーンメック村大人、関心のある者、C4C青少年キャンプ参加者）
9月17日	ぼかし堆肥を投入、雑草抜き	6-7人
10月8日	液肥投入	6-7人
10月27日	液肥2回目投入	6-7人
12月5-9日	稲刈り	40人（子ども10人、ノーンメック村大人23人+その他関心のある者7人）
2017年1月10日	米蔵へ運搬、マメ科の種子を播いて覆土	10人

#### ◆伝統知識を学ぶセミナー「稲作」及び液肥作り研修

2017年1月29日 於ノーンメック村日タイ交流コミュニティセンター 参加人数25人

有機米の収穫後、化学肥料や農薬まみれの農業に疑問を持ち、自然農法、有機農法に関心がある村人が増えたこともあり、村の子どもと大人が集まり、村人たちの中で稲や米に関する知識を出し合って交流しました。米は昔から東北地方の主食としてだけでなく、稲作に関わる儀礼や文化（雨乞い、稲の女神、神話、言い伝え）を生み、共同体活動の中心として重要な役割を担ってきました。話し合いでは、先祖から伝えられた米に関わる様々な知識がまだ長老たちの中に集積されていることがわかりましたが、近年、出稼ぎや近代農業の導入によって、伝統の若い世代への継承が途絶え、伝統の知識やノウハウの利用方法、その価値の高さがわからなくなっています。

そこで村長をはじめとする村人有志は、実験農場の経験から、自分たちの農地でも有機的な土壌改良方法を利用することにし、液肥の作り方を学ぶ研修を行い、各々の畑に液肥を散布しました。

また話し合いでは、地元固有の稲や有用植物の品種を復活させる案も出ており、次年度に取り組む予定です。

## (2) 森林保護・保全、有効利用活動

◆**森に学ぶ活動** 2017年5月7日 於ノーンメック村公共林 参加人数25人（大人15人、青少年10人）

植林活動は、村の財産である森林を守るために大人と青少年が一緒に行う活動です。私たちの暮らしや環境にとって、森林が重要であることを子孫に伝えていく活動でもあります。

これまで、村の公共地で大規模な植林をしてから、村人たちは自主的な水源確保や、補助的な植樹などの保護活動を行ってきました。2016年度は、村人たちが主体となって次の段階の計画を考えるため、森林に入り、公共林と村内の田畑にある樹木を調査しました。調査活動中に、子どもたちは森の様々な動植物について学びました。

調査の結果、以前より薬用植物などの有用植物が減少していることがわかり、個人と公共の土地の両方における植林計画を練りました。

◆**有機農業視察** 2017年5月21日 於コンケン県シラー郡バーンハーン行政区ノーンハイ村、ノーンナムクンヌア村、ノーンウェーン村 参加人数30人（大人25人、青少年5人）

今後有機農業を行うために、3か所の有機農業を行う農家を視察しました。

ノーンメック村では、このままでは「農文化」が全く継承されなくなるという危機感があります。今回は子孫に残すべき、私たちの生活文化、農文化とは何なのかを考える交流になりました。

3か所の内一か所の農場は、若い夫婦が始めたところで、夫は工学修士卒業後、外資系の会社で働いていましたが、夫婦ともに競争社会のストレスによって疲れ果て、農業を始めることになったそうです。周囲の反対もあったそうですが、努力して自分の農法を確立し、今は農場の成功を見て人々も受け入れてくれたそうです。そして農業を始めた一番の成果は、家族の幸福だと語りました。

帰村後の話し合いで、まず、村の公共林にキノコを取り戻すこと、農業に堆肥を使うこと、有用植物、薬草などの種子ファンドを作ることの3点を目標にあげました次年度に取り組み始めます。



## 4. 保護者とのネットワークづくり（子どもを愛する人のネットワーク）

### (1) 親子キャンプと家庭訪問

毎年8月14日の母の日前後に親子キャンプを開催していましたが、今年度は「青少年キャンプ IN タイ」に参加した子どもたちと一緒に田植えをしました。

奨学生の保護者のほとんどは、仕事で一日中家にいないため、帰宅時間以降の家庭訪問を実施しました。時には夕食をともにしながら、子どもの様子などについて保護者と話し合い、また子どもはこれまで保護者に言えなかったことを直接言える機会になりました。このような訪問活動をすることで、子どもたちが置かれている家庭環境を把握することができ、子どもと保護者が進路などを一緒に話し合うきっかけ

くりにもなりました。KK 財団のフィールドワーカーが保護者と子どもの仲介に入る形の家庭訪問によって、子どもに罵倒の言葉ばかり投げかけていた親が、子どもと話し合うようになったそうです。

実施日	活動	場所	参加者人数
2016年7月14日、8月31日、10月13日、11月7日、12月4、5、6日、2016年2月15、20日、5月4日	子どもを愛する人のネットワーク・家庭訪問	コンケン県ノーンタカイ村ノーンメック村	20人

## 5. 牛銀行プロジェクト

2013年6月からノーンメック村で開始した牛銀行プロジェクトは、出稼ぎによる若年層流出を止め、コミュニティの担い手を育てるために、牛を育てて得た利益で村の青少年の就労支援基金の設立を目指すものです。しかし2015年頃から口蹄疫が牛市場で流行りはじめ、村の牛にも感染しました。そのため2016年度、新たな牛は購入を見合わせました。



各3頭を貸出した2世帯では、すべての母牛が子どもを生みました。1世帯の母牛3頭は子牛1頭とともに次の飼育者の元へ行き、この世帯では2頭の子牛を飼育しています。次の飼育者に預けられた1頭の子牛は、牛銀行所有の牛ですが、もう少し大きくなるまで新しい飼育者が面倒を見ています。もう1世帯の母牛もそれぞれ子どもを産みましたが、離乳期が過ぎてから新たな飼育者の元へ行きます。

牛の飼育者は、実験農場の耕起なども積極的に手伝ってくれており、協働の輪が広がっています。なお今後、新たな牛を購入するかどうかは、市場の様子を見ながら牛銀行委員会が決定します。

### 【成果と課題】

子どもたちへの支援活動は、地域住民の協力なくしては成り立ちません。2015年度より活動の中心を少しずつノーンメック村に移し、村人たちとともに子どもへの支援を考えていくことを大切に事業を進めました。今年度は、子どもたちを見守り育てるコミュニティ自体の力を強化するために、有機農法や食の安全性を考えた生活改善を目指しました。村人たちの経済力向上に加え、伝統的知識の継承を通じて、地元文化の重要性に気づき、自分たちの消費生活のあり方を見直し、農文化を基盤とした共同体の再構築を目指しています。その達成には大人と子どもたちが一緒に活動することが不可欠である考えます。

2016年度は、初めてコミュニティの協力を得て稲作を行い、有機農法に関心を示す村人が増えました。実験農場で誰もが有機農法を学ぶことができるような、子どもとコミュニティの有機農業研修センターを目指していきます。そして、子どもたちの成長の見守り活動を地域ぐるみで取り組むことができるコミュニティを目指します。



## B. フィリピン国JPCOM-CARES(フィリピン国バギオ市、ベンゲット州カバヤン町)支援事業

JPCOM-CARES (ジェイピーコム ケアーズ) は、必要な公共サービスや社会資源の限られた山岳部バギオ市、ハッピーハロー村 (バギオ市内)、カバヤン町の3カ所を拠点に、しょうがいのある子どもや青年層が、地域で自立し尊厳のある暮らしを営める地域づくりに取り組んでいます。

◆2016年度の事業対象者数 (人) : 2016年6月～2017年5月の期間、右記の人数を対象に事業を行いました。

地域	継続	新規	計
バギオ市	128	28	156
ハッピーハロー村	12	3	15
カバヤン町	40	3	43
計	180	34	214

### 1. リハビリテーション&保健プログラム

#### (1) リハビリテーションセンターでの理学療法、作業療法、教育支援

バギオ市にあるリハビリテーションセンター「STAC5 (Stimulation & Therapeutic Activity Center : スタックファイブ)」(以下STAC5)では、あらゆるしょうがいを持つ子ども・青年を対象に、一人ひとりに必要な理学療法、作業療法および特別支援教育をアセスメントし、必要なサポートを行っています。月～金曜日、8時～17時まで開所し、一人につき1回約60～90分のリハビリテーションを週に2回提供しています。年度途中には、利用登録者それぞれの成長や課題の再評価を行い、支援計画の変更を行なっています。

◆リハビリテーション利用登録者数 (人) :

理学療法	作業療法/特別支援教育	計
19	37	56

◆リハビリテーションサービス提供数 (回) :

理学療法	作業療法	特別支援教育	計
1,017	959	790	2,766

#### (2) 医薬品の支給

栄養失調状態にある子どもたちの健康の維持・向上を目的にバギオ市20人、ハッピーハロー村7人、カバヤン町20人の計47人の子どもや青年に対して、1年間マルチビタミン剤を支給しました。毎月、保護者や青年本人に体調についてヒアリングをし、経過観察を行いました。体重の増加、食欲の増進、睡眠の改善やアレルギーの減少等の改善が見られています。また、疲れにくくなり、体調も崩しにくくなったといった変化も出ています。バギオ市の20人の保護者に対しても、健康維持のためビタミン剤を支給しました。

(3) 無料の歯科検診・治療

経済的な理由やしょうがい者の特性から、歯科検診を受けることができずに、予防や早期治療の機会を逃してしまい、口腔内の状態が悪化している子どもたちが多くいます。治療を受けている場合でも、必ずしも歯科医の免許を持った医師の元で安全かつ高度な技術で治療を受けられているわけではありません。そのため、JPCoM-CARESと連携する歯科医の協力を得て、しょうがい者特性へも配慮しながら、バギオ市30人、ハッピーハロー村9人の計48人に対して、歯科検診、クリーニングと治療を実施しました。2名は抜歯が必要であったため、整った環境の中で安全な治療を受けることができました。



(4) 温水治療法

4月19日、理学療法を受ける10人の子どもとその保護者20人が参加し、温水プールでの水治療法を行いました。理学療法士は、体や関節を柔軟にし可動域を広げる水中でのマッサージ方法を保護者に指導しました。



(5) 医療サービスや医療機関の紹介・照会

新規利用者や療育支援をおこなっていく中で専門医による受診の必要性が出てきた子どもを対象に、地域パートナーである小児科医、内科医、神経科医、歯科医、医療機関に紹介しました。

	人数	紹介・受診内容
8月	7	ハッピーハロー村のビタミン剤を服用する7人を対象に、内科医による無料の健康診断を実施しました。咳や鼻炎の症状がある青年に対して、処方箋を出してもらいました。
11月	1	車による事故のため、CTスキャンの必要が出た子どもを病院とつなぎました。
12月	24	バギオ自動車フォーラムに支援をいただき、インフルエンザワクチンの接種を行いました。
12月	15	バギオ自動車フォーラムより、栄養価の高い粉ミルクと紙おむつの支援をいただき、必要とする乳幼児へと繋ぎました。
1月	3	STAC5での療育計画の内容を更新するため、専門医とつなぎ、子どもたちの発育状況を再評価してもらいました。

(6) 医療費等の一部支援

STAC5での療育支援を開始する際には、診断書を元に個別支援計画を作成します。子どもたちのしょうがい把握やその特性を理解するためには、専門医による診断が重要です。しかし、専門医による初回診察料は2,000～2,200ペソと非常に高く、必要な診察を受けられない子どももいます。また、急に体調を崩した際にも、経済的な理由により適切・必要な医療サービスを受けられない子どももいます。そのため、小児科医や専門医による診断、レントゲン検査、CTスキャンや医薬品等にかかる費用の一部を1人につき、JPCoM-CARESより1,000ペソ、保護者会の緊急基金から500ペソを支援しました。

バギオ市	ハッピーハロー村	カバヤン町	計(人)
30	0	5	35

## 2. 教育支援

### (1) 奨学金

奨学金は、学費以外にも通学費や制服の購入などにも使われており、子どもたちの学びをサポートしています。今年度は、バギオ市7人、カバヤン町27人の計34人に対して奨学金を支給しました。1学期の前半（6～8月）中に、奨学生候補者の家庭や学校訪問を行い、学習状況をヒアリングし奨学生を選定しました。進学した新たな学校での生活に馴染むことが難しい奨学生もいましたが、定期的に保護者や奨学生とミーティングを重ね、1人を除き33人が進級・進学することができました。1人は、叔母の仕事を手伝えるために町を離れることになり、中途退学したため、奨学金の支給を停止しました。

奨学生が通う学校を訪問し、担任の先生と子どもたち一人ひとりの学習状況のヒアリングを行いました。「何度も言葉をかけながらサポートを続けてきたことで、授業以外の学校行事にも参加できるようになった」、「集中力が途切れやすい」、「指示や言葉の理解が難しい時がある」など、個別の成長と課題を共有し、学習支援の方法について意見交換を行いました。先生からのヒアリング内容をSTAC5での療育計画に反映し、個別課題のサポートに取り組んでいます。また、頻繁に起こる頭痛により学校を休みがちな奨学生もいたため、小児科医の受診ができるようにコーディネートを行いました。

今年度、長年継続して奨学金の支援を行ってきた青年2人が大学を卒業しました。大学では専門スキルや就職を目指す分野に必要な知識を獲得するため、それぞれに目標を持ち、一生懸命に勉強に励んだと話してくれました。勉学だけでなく、教会でのボランティア活動にも取り組むなど、様々な面で経験を重ねていました。フィリピンでは卒業後に就職活動をスタートするため、「これから積極的に就職活動をしていきたい」、「働きたいと思っている企業に就職したい」、「就職して家族をサポートしていきたい」と、新たな目標や意気込みを聞かせてくれました。その場にいた保護者たちも、安堵と喜びに満ちた表情で青年たちを見つめていました。

### (2) 学用品の支給

経済的な理由から、新年度に必要な学用品の購入が難しい家庭の子どもを対象に、バギオ市20人、カバヤン町26人の計46人に対して学用品セットの支給を行いました。

## 3. 自立生活プログラム

### (1) プログラムの実施

青年へと成長している子どもたちが、将来、地域の中で、自分で、または家族や地域の方々とともに自立した生活ができるように、2012年10月より「自立生活プログラム」を開始しました。

バギオ市では、リハビリテーションセンターSTAC5を拠点にし、毎週金曜日をプログラム実施日とし、午前中に新規参加者、午後に継続参加者に分かれて取り組みました。バギオ市内のハッピーハロー村では、スタッフが地域へ出向き、地域の多目的ホールを拠点にコミュニティベースで実施しました。カバヤン町は、居住地域が広範囲に及ぶことから、夏期休暇期間を利用し、参加者とスタッフが一週間共同生活をし、プログラムを行いました。

今年度は、これまでのプログラム内容を重複訓練するとともに、各地域や参加者の年齢等の特徴を反映したプログラムづくりを行いました。ハッピーハロー村では、参加者が就学期間を終えた20

代以上の青年たちであるため、生計につながるスキル獲得を目指し、手工芸技術プログラムに力を入れました。カバヤン町では、農業で主収入を得ている家庭の子どもが多いため、JPCOM-CARESの養豚場近くに畑を作り、手入れの方法、ハーブや花、野菜栽培をスタートしました。また、養豚プロジェクトに参加する家庭の子どもたちが家族を手伝えるように、養豚場の清掃もプログラムに取り入れました。

また、許可を得て公園の草抜きや花植えを行ったり、地域行事の際にバナナ春巻きやハロハロ（かき氷）を販売するなど、屋外活動を積極的に取り入れ、地域社会に関わりながら体験を通した実践的な学びを得られる機会を作りました。

◆2016年度プログラム回数

地域	参加人数	実施回数
バギオ市	18	27回
カバヤン町	13	5泊6日を1回 9泊10日を1回
ハッピーハロー村	7	46回



◆具体的なプログラム内容（\*マークは今年度の新規プログラム）

項目	内容
社会性、コミュニケーション力、マナー	コミュニケーションスキル / マナー / テーブルマナー / 教会でのマナー / *プレゼンテーションスキル
身だしなみや清潔の保持	衛生・身だしなみ / 口腔ケア
健康管理	医薬品の管理 / 応急手当の方法 / *病気の理解と対応 / *メンタルヘルス（ストレスマネジメント）
日常生活スキル	家事技術 / 調理技術 / お金の管理 / 交通機関の利用方法 / *養豚場の清掃 / *畑の手入れ / *野菜や花の栽培
手工芸技術	鍋敷きづくり / 足拭きマットづくり / アクセサリーづくり / クリスマスデコレーションづくり / フラワープランターづくり



## (2) 参加者の家庭訪問・モニタリング

プログラムで習得したスキルを各家庭で実践できているか、家庭環境の観察や保護者へのヒアリングを通して評価を行いました。ほとんどの参加者は、各家庭でも調理や洗濯、掃除などの家事を手伝うようになってきました。また、5時には起床するようになり、自立生活プログラムで身につけた生活リズムを、その後の日常でも継続していました。

保護者からは、「公共の交通機関を利用できるようになってほしい」、「お金を管理できるようになってほしい」、「薬を服用しているため、薬の管理も自分でできるようになってほしい」といった声が聞かれました。参加者からは、上級の調理技術や製パン技術を学びたいという要望が上がっており、今後のプログラムに反映していく予定です。

## (3) 起業支援

今年度は、対象者がおらず具体的な支援者はいません。2014年度に起業支援をおこなったアイスキャンディ販売を始めたハッピーハロー村のJobertさんですが、先に商売を始めていた近隣の同業者からのクレームで、現在は販売を中止している状態です。プログラムで習得したビーズを使ったアクセサリーや古着を使った鍋つかみ・足拭きマットを熱心に制作し、地元の雑貨店や村の行事で販売を続けています。Jobertさん以外にも、手工芸品の制作と販売を開始したメンバーが数名出てきていますが、マーケティングや販路の確保が難しく、課題となっています。

## 4. 保護者のエンパワメント

### (1) 保護者会の運営支援

JPCoM-CAERSのパートナー団体でもある保護者会と連携を取りながら活動を進めるため、保護者会の年間計画の策定をサポートしました。また、保護者会もJPCoM-CARESが主催する行事の運営サポートや一部の費用負担などを担い、協力関係が築けています。

### (2) 生計向上支援

野菜づくりで生計を立てているものの資金不足により生産量向上のための設備拡充ができずにいた保護者に対して、7000ペソの資金援助を行いました。

ネイルサービスで収入を得ている保護者を対象に、地元のネイリストの協力を得て、新たなネイルデザインや技術獲得を目指した研修を行いました。研修後、新規顧客の獲得やサービス料金の値上げを実現できた保護者もあり、技術や収入の向上に加えて、自信も得られた様子です。



(3) 生計向上プロジェクト：養豚プロジェクト（カバヤン町）

カバヤン町では、小規模養豚を通じた副収入による家庭の経済的な安定を目指し養豚プロジェクトを行っています。養豚を希望する家庭に対し、JPCOM-CARESの養豚場で生まれた仔豚を1家庭につき4頭ずつ貸出し、市場で売れる豚になるまで（約5か月間）各家庭で飼育してもらいます。豚の成育状況にもよりますが、豚1頭分の実質収入は、カバヤン町の一般的な家庭の2か月分の収入に相当します。保護者の多くが農業で生計を立てていますが、その収入は天候や市場価格に左右され安定しないうえ、農薬を購入するために借金を抱えている家庭もあります。特に近年は、海外からの安い輸入野菜が増加し市場に出回るようになりました。結果、仲買人による買取額が暴落し、農家の収入が激減し、農薬や様々なローンを返済すると手元には現金が残らない状況です。養豚で得た収入は、子どもたちの教育費や食費、借金返済に充てることができます。



2016年度は、8家族に32頭の仔豚を貸し出すことができました。養豚プロジェクトを開始した当初は、1家族につき2頭ずつの貸与でしたが、JPCOM-CARESの養豚場の母豚の数も増え、1回の貸与を4頭へと増やすことができます。4頭全てを販売できた場合は家庭の大きな収入になり、また雌豚を母豚に育てることで自ら小規模養豚を運営しやすくなってきています。現在、何名かの保護者は小規模養豚の運営を開始することができました。

**5. 権利擁護・コミュニティ啓発活動**

子どもたちひとり一人の尊厳や権利が守られ笑顔で育つ地域づくりを目指し、しょうがいについての理解、しょうがい者のマグナカルタ（法律）の普及・啓発、権利擁護活動として、以下の取り組みを実施しました。

	行事名	地域	参加者数	内容
7月25～26日	身体しょうがい児セミナー	バギオ市	のべ42人	STAC5で理学療法を受けている子どもの保護者を対象に、各家庭で取り組めるマッサージの方法や関節の可動域や動かし方、身体機能訓練の方法などの研修を行いました。
9月13～14日	しょうがいや行動特性への対処方法を学ぶセミナー	バギオ市	のべ35人	STAC5で作業療法や特別支援教育を受けている子どもの保護者を対象に、学習障害、ダウン症、自閉症等、それぞれのしょうがいと特性の違いを理解することを目的に研修を行いました。一人ひとりの成長や課題に合わせてどう関わるか、その方法やヒントなど、保護者同士のディスカッションを通して学び合いました。
2月28日	自閉症、ダウン症&知的しょうがい啓発月間	バギオ市	39人	子どもたちの社会性を高めることを目的に、STAC5を会場として、アート活動や映画上映会などを行いました。

3月15日	しょうがい者の権利や法律セミナー	カバヤン町	47人	保護者や当事者となる青年に加えて、村の役員や委員の方々にも参加いただき、しょうがい者の権利や利用できる制度などについて研修を行いました。ほとんどの参加者は、法や制度を認知していましたが、しょうがい者登録やIDカードの取得方法を知らず、周りに聞くこともできず、取得している人がいませんでした。その場にいた自治体役員は、今後、IDカードを取得し、制度を利用できるようにサポートをしていくと約束してくださいました。
3月23日	しょうがい者の権利や法律セミナー	ハッピーハロー村	37人	また、いじめの体験を共有してくれた青年メンバーが数名いました。その体験がきっかけで、「内気になってしまった」、「人と関わることに臆病になっている」などと気持ちを話してくれ、「いじめにどのように立ち向かっていったらいいか」を、参加者で話し合いました。



## 6. ネットワークづくり・社会資源の活用

### (1) 地域行事・集い

地域パートナーや各関係者・機関とのネットワークの構築のため、以下の取り組みを実施しました。

	行事名	地域	参加者数	内容
7月27日	しょうがい予防&リハビリテーション月間	バギオ市	121人	しょうがい予防やリハビリテーションの啓発活動として、子どもや保護者、地域パートナーが一斉に集い、しょうがいへの理解を深める交流の場を持ちました。
10月25日	STAC5 19周年記念	バギオ市	149人	STAC5が設立されて19周年を祝う記念行事を行いました。日頃より協力してくださっている地域パートナーが多数集まり、今後も継続した連携を確認しました。
11月19日	ハロウィンの集い	ハッピーハロー村	12人	アメリカ人ボランティアの発案で、ハロウィンを祝う集いを行いました。他の国の文化や風習を知り学ぶ機会となりました。

12月20日	クリスマス&年末の集い	バギオ市	199人	複数の地域パートナーがスポンサーとなり、ゲームの景品や子どもたちへのクリスマスプレゼントの支援をくださり、行事の作り手として参加しました。
1月7日	新年の集い	カバヤン町	74人	子どもたちや保護者が集い新年のお祝いをしました。子どもも大人も一緒になって、ゲームやプレゼント交換を行い、楽しい時間をともに過ごしました。
4月8日	家族と地域パートナーの集い	ハッピーハロー村	40人	自立生活プログラム参加者の表彰式を行い、保護者や村の役員が集まりました。地域パートナーからは、参加者たちの地域への貢献や協力に感謝の言葉が寄せられました。
4月25日	全体集会（総会）	カバヤン町	38人	奨学生と保護者による近況報告、保護者の生計状況のヒアリング、ビタミン剤を支給する子どもたちの体調の確認を行いました。
5月23日	ATC 7周年記念	カバヤン町	58人	保護者の投票により新たな保護者会役員を選定しました。カバヤンの青年層で構成したカバヤンユースクラブを発足し、活動していくこととなりました。



## (2) 他組織・個人からの寄付金や物資支援とそのコーディネート

今年度も地元ラジオ局や様々な個人・団体から12件、療育支援や自立生活プログラム等で使用できるトレーニングボール、温湿熱パック、車椅子、体温計や血中酸素濃度計など、多種多様な備品の寄付をいただきました。

### 【成果と課題】

この数年、各地域パートナーとの連携強化や新規パートナーの獲得、ネットワークづくりに力を入れていますが、2016年度も引き続き、精力的に地域パートナーの参加に力を入れました。しょうがいのある子どもたちが元気に育つ地域づくりは、子どもたちや保護者だけを対象にして取り組むだけでは成し得ません。連携・協力団体に対して、あらゆる活動への参加を積極的に呼びかけ、特に、コミュニティ啓発活動や地域行事への参加を促した結果、多数の参画を得ることができました。地域パートナーと子ども・保護者が出会い交流する場を作っていくことで、ニーズに対する新たな連携が今後期待できます。JPCOM-CARESも、連携組織へ出向き、日頃からのコミュニケーションを図りました。特に、介護・社会福祉関係の大学や専門学校を訪問し、学生にJPCOM-CARESの取り組みについて紹介する機会を作りました。



療育支援の支え手の獲得、学生たちのしょうがいや福祉に対する意識向上、学校や先生との連携に発展しています。

5年目に入った自立生活プログラムは、地域や参加者の特色を生かしたプログラムも取り入れました。地域行事で食品販売を実施したことをきっかけに、自宅でハロハロ（かき氷）の販売を始めた参加者も出てきました。また、マッサージやネイルサービスで生計を立てる青年たちに対しては、技術指導や専門家による研修を実施するなど、個別支援も行いました。プログラムの中で様々なチャレンジを積み重ねている参加者たちは、少しずつそれぞれに将来を思い描きながら、自身で考え動き始めています。

数年前までは、子どもだった参加者たちもすっかり大きくなり青年へと成長しています。今年は、初めて大学を卒業した奨学生たちが社会に出て働き始めます。これからも JPCOM-CARES との繋がりを保ちながら、今度は自身が家族や同じようにしょうがいをもつ子どもたちの支え手となっていきたいと話してくれました。カバヤン町では、青年メンバーを中心としたカバヤンニュースクラブが発足しました。青年たち自身が担い手となる活動に、今後期待していきたいと考えます。

### C. 海外プロジェクト助成事業

2013年度よりカンボジアのNGOである Khmer Community Development (以下、KCD) が活動するベトナム国境の村プレックチュレイの子ども会活動を支援しています。

カンボジアでは、就学年齢になっても学校に行けない子どもがたくさんいます。KCDの就学支援や社会活動などによって子どもたちはエンパワメントしていきます。保護者も子どもたちへの教育の重要性に理解を深め、プレックチュレイでは就学率が上がりました。またコミュニティ開発においても、米銀行や協同組合の組織化に一定の成果を得ました。



KCDは、2017年10月よりプレックチュレイの周辺へと活動対象地域を広げようとしていることなので、2017年3月にC4C代表理事栗原、加藤が、KCDスタッフとともに新しいフィールド候補地を視察しました。プロジェクト開始前の事前調査と調整は重要な過程です。子どもの就学問題や農民の貧困はどこでも共通課題ですが、地域には地域ごとの事情があります。プレックチュレイ周辺は、特にベトナム国境に近いので、

- ・ 子どもがベトナムに乞食として売られる事態
- ・ 農業をやめて経済特区に建設されたカジノや工場に安い賃金で働く状況
- ・ 川に近いところは洪水や護岸の浸食に悩まされ、内陸では干ばつに悩まされる地域的多様性
- ・ 農村部での学校教師数、子どもたちに使用する教科書や本の不足

このような実態を把握しました。

現在、KCDでは、それぞれの地域に応じた計画を立て、これまでの活動経験を糧に、新しい活動地域の選択をしているところです。

子どもたちのエンパワメントを中心に、C4Cは、新しい活動地域でもKCDと協働しながら、地域の状況に応じた方法で支援していきます。

## 1-2. 国内支援事業「宮城県における地域一体で取り組む福祉・防災学習推進事業」

『東日本大震災で甚大な被害を被った宮城県において、各地域全体の福祉力・防災力を高めるとともに、普段から、住民一人ひとりの命と暮らしを守ることを目指す。』

このことを実現するために、C4Cは2016年度、宮城県内で取り組まれる児童・学生・青年層が主体的に参画する福祉・防災学習の実施について、10歳の子どもの成人する期間をイメージして、10年スパンの学習ビジョンを持ちながら、福祉・防災学習を実施・検討・計画されている地元の社会福祉協議会、NPO、学校等とご相談しながら、次のようなことに取り組みました。

### 1、福祉・防災学習プログラム・ツール研究開発

自主事業として「わたしたちの災害食」普及・啓発プロジェクト、「学びと暮らしへの安心感を高める防災学習」推進プロジェクトを実施し、県内外の団体・組織と連携しながら、福祉・防災学習のプログラムやツールの研究開発を行いました。

#### ①自主事業：「わたしたちの災害食」プロジェクト

2016年度は、平時からの食育も意識しながら取り組むこと、大人も子どももともに取り組めること、その地域の食材も活用した地産地消の災害食メニューを開発することを目標に、宮城学院女子大学食品栄養学科学生サークルFood and Smile!と連携しながら下記事業に取り組みました。

#### 2016/10/17「家庭教育学級」

主催：金津児童センター（角田市社会福祉協議会）

協力：Food and Smile!、食生活改善推進員、民生委員、C4C

参加者：児童センターを利用している親子10組＋地域住民10人程度

会場：金津児童センター

内容：乾パンピザなどの非常食をアレンジした災害食メニュー、アルファ米ずんだもちなどの地産地消災害食メニューの調理・試食

#### 2016/12/23「おいしく食べよう！非常食」

主催：南小泉南赤十字奉仕団、仙台市社会福祉協議会若林区事務所

協力：Food and Smile!、C4C

参加者：近隣の小学生・中学生・奉仕団員計35人

会場：南小泉町内会館

内容：サバ缶パエリア、保存パンクリスマスケーキなどのクリスマスバージョンの災害食メニューの調理・試食



#### 2017/1/14「住民参加による防災推進研修会 第一分科会／つくって食べて考えよう！災害時の食事」

主催：愛媛県社会福祉協議会

講師：Food and Smile!、C4C

参加者：県内にお住まいの関心のある方 21 人

会場：松山市青少年センター

内容：C4Cによる講話、Food and Smile!考案災害食メニューの調理・試食

#### 2017/1/15「防災推進研修会」

主催：西予市社会福祉協議会（愛媛県）

講師：Food and Smile!、C4C

参加者：市内にお住まいの関心のある方 40 人

会場：西予市教育保健センター

内容：愛媛や西予の食材をつかった災害食メニューの調理・試食、防災ゲームの体験

#### 2017/1/22「FAS&C4C“食”を通じた防災活動報告会」

主催：Food and Smile!、C4C

協力：仙台市社会福祉協議会

参加者：関心のある方 16 人

会場：若林区中央市民センター別棟

内容：2016 年度の活動報告、Food and Smile!考案レシピの調理・試食



#### 2017/2/9「災害時生活支援講座」

主催：日赤六郷地区奉仕団

講師：Food and smile!、仙台市社会福祉協議会若林区事務所、C4C

参加者：六郷地区奉仕団員 30 人

会場：六郷市民センター

内容：アルファ米ずんだもちの調理・試食

#### 2017/3/30「おやつレシピを考えよう①」（2016 年度～2017 年度継続事業）

主催：柴田町社会福祉協議会

協力：Food and Smile!、C4C

参加者：柴田町社会福祉協議会福祉・防災学習サポーター15 人

会場：柴田町地域福祉センター

内容：非常食をアレンジしたおやつメニューの考案

#### ②自主事業：「学びと暮らしへの安心感を高める防災学習」推進プロジェクト

昨年度作成した「実践者の声から～防災学習のお悩み」を活用した「防災学習勉強会」の開催、生活力の向上から防災力の向上を目指す親子向け防災ハンドブックの作成に取り組みました。

防災学習勉強会「学び合おう！語り合おう！防災学習のお悩み」

①2016年7月9日(土)13:30～16:30 第一回「防災学習とメンタルヘルス～あなたも大事、私も大事」  
講義や演習を通じて、防災を学ぶときに子どもに起こる変化や、子どもの「学び」や「こころ」  
に触れるときのポイントについて学びます。

ゲスト：佐藤 利憲 氏（公立大学法人福島県立医科大学 看護学部 家族看護学部門 講師）

相澤 治 氏（NPO法人子どもグリーンサポートステーション 事務局長）

会場：エル・ソーラ仙台

参加者：12人

②2016年7月30日(土)15:00～18:00 第二回「防災学習・学びのスキル①クロスロード」  
防災学習プログラム「クロスロード」を体験し、学習者の年齢層や地域性に合わせた防災学習の実践に  
ついて考えます。

ゲスト：田中 勢子 氏（わしん倶楽部 代表／減災コーディネーター）

会場：仙台市民会館

参加者：12人

③2016年9月3日(土)15:00～18:00 第三回「防災学習・学びのスキル②大震災から学ぶふくしのこ  
ころ」

黒田氏の開発した防災学習プログラム「大震災から学ぶふくしのこころ」を体験し、日頃から共助の心  
を育む大切さについて考えます。

ゲスト：黒田晋氏（社会福祉法人仙台市社会福祉協議会若林区事務所 主任／コミュニティソーシャルワ  
ーカー）

会場：仙台市民会館

参加者：15人

④2016年10月1日(土)15:00～18:00 第四回「防災学習・学びのスキル③防災食育ゲーム」

コミュニティ・4・チルドレンが開発した「防災食育ゲーム」を体験し、防災学習プログラムの開発の  
プロセスについて考えます。

ゲスト：菅原 清香（一般社団法人コミュニティ・4・チルドレン宮城事務局 福祉・防災学習コーデ  
ィネーター）

会場：仙台市民会館

参加者：11人

⑤2016年11月19日(土)15:00～18:00

第五回「学校における防災学習の取り組みかた」

学習指導案の作成や模擬授業の実施等を通じ、学校におけ  
る防災学習の取り組みかたについて考えます。

ゲスト：木越 研司 氏（仙台市立北中山小学校 校長）

会場：仙台市民会館

参加者：15人



⑥2016年12月3日(土) 15:00~18:00 第六回「地域における防災学習の取り組みを深め、輪を広げるために」

勉強会の振り返りをしながら、地域におけるこれからの防災学習のすすめかたについて考えます。

ゲスト：栗原 英文（一般社団法人コミュニティ・4・チルドレン 代表理事）

会場：仙台市民会館

参加者：12人

#### 親子向け防災ハンドブックの作成（2017年度内完成予定）

「生活力を高めることは、防災力を高めること」をテーマに、4歳～小学校低学年程度のお子さんがご家族と一緒に楽しみながら日頃の生活力・いざという時の防災力を高められるような防災ハンドブックの作成に取り組んでいます。

## 2、福祉・防災学習モデル事業実施支援

県内各地における事業の企画・実施をサポートしました。

### ①地域福祉の担い手育成プログラム

運営委員会やモデル事業の実施サポートを行いました。

#### 「福祉教育推進事業運営委員会」（2016年度～2018年度継続事業）

主催：女川町社会福祉協議会（宮城県社会福祉協議会「地域指定福祉教育推進事業」による実施）

「一人ひとりのちがいを認め合い、支え合うことの大切さへの気づきをうながす」ことをテーマに、運営委員会を設置。どのような取り組みが必要か・その際に必要な工夫や配慮は何かを話し合い、2017年度の事業実施に向けた準備を進めています。C4Cでは運営委員会における進行役を担当しています。

2016/10/24	2016年度第一回運営委員会
2016/11/30、2016/12/1	女川小学校における福祉の授業の授業参観
2016/12/20	宮城県社会福祉協議会「福祉教育学習会」への参加 2016年度第二回運営委員会
2017/1/25	2016年度第三回運営委員会
2017/2/24	2016年度第四回運営委員会
2017/3/21	2016年度第五回運営委員会
2017/4/21	2017年度第一回運営委員会
2017/5/14	おらほの女川食堂プロジェクトチーム「女川子どもの祭」開催協力
2017/5/30	2017年度第二回運営委員会

「おおさき福祉学習推進事業」 (2016年度～継続事業)

主催：大崎市社会福祉協議会

地域福祉推進の人材育成を目的とした福祉学習事業を、支所をモデル指定し実施。2017年度は岩出山支所を指定。岩出山支所・大崎市社会福祉協議会本所・C4Cの連携により事業の企画立案・実施に取り組みます。C4Cは企画立案・実施のアドバイザーを担当しています。

2017/1/23	大崎市社協本所との事業実施に向けた打ち合わせ
2017/4/4	大崎市社協本所との事業実施に向けた打ち合わせ
2017/5/22	岩出山支所・大崎市社協本所との第一回打ち合わせ

②「福祉」を伝えるプログラム

「福祉」の意味を体験学習を通じて考える機会をつくりました。

2016/7/29「夏休み福祉体験」

主催：角田市社会福祉協議会

協力：C4C

参加者：市内の小学4～6年生22人

会場：角田市総合保健福祉センター

内容：五感がテーマの福祉・防災体験プログラム



2016/8/5「夏ボランティア体験」

主催：柴田町社会福祉協議会

協力：柴田町身体障害者福祉協会、柴田町社協福祉・防災学習サポーター、C4C

参加者：市内の小学3～6年生30人

会場：柴田町地域福祉センター

内容：地域の方々との交流、ニュースポーツの体験

③ボランティア体験プログラム

平時や災害時において、自分にできるボランティア活動を考える体験活動を行いました。

2016/7/25「中・高校生のためのボランティアスクール」

主催：大河原町社会福祉協議会

講師：ウェザーハート災害福祉事務所、C4C

参加者：町内の中高生15人

会場：大河原町福祉センター

内容：災害時に自分にできるボランティア活動を考えるワーク

2016/8/2「夏ボランティア体験」

主催：柴田町社会福祉協議会

協力：柴田町自立支援通所事業春風、デイサービスセンター、C4C

参加者：町内の小学 1～2 年生 22 人  
会場：柴田町地域福祉センター  
内容：春風やデイサービスセンターでのボランティア体験

#### 2016/8/8～9「サマーボランティア体験」

主催：角田市社会福祉協議会・柴田町社会福祉協議会  
協力：臥牛三敬会 虹の園、NPO法人角田保育ママの会、C4C  
参加者：角田市・柴田町の中高生 21 人  
主会場：角田市総合保健福祉センター、柴田町地域福祉センター  
内容：福祉施設でのボランティア体験、災害ボランティア体験

#### 2017/2/25「ボランティアスクール・ボランティア交流会」

主催：気仙沼市社会福祉協議会  
講師：C4C  
参加者：市内の小学生～中学生とボランティア計 25 人  
会場：松岩公民館  
内容：災害食の調理・試食、避難所ボランティア体験



#### 中学生・高校生・大学生のボランティア場づくり事業（2016 年度～継続事業）

主催：仙台市社会福祉協議会若林区事務所  
協力：一般社団法人 ReRoots、宮城学院女子大学食品栄養学科学生ボランティアサークル Food and Smile!、南小泉南赤十字奉仕団  
中高生のボランティア活動を促すため、区内で活動する大学生ボランティアに協力をいただき中高生と一緒に取り組んでいただくことで、ボランティア活動の促進や中高生が将来のキャリアについて考える機会とするとともに、区内で活動するボランティア団体や地域団体の輪を広げることを目的として 16 年度から始まった事業です。  
C4Cは全体コーディネートのサポートを担当させていただきます。

2017/5/1	社協担当者との打ち合わせ
----------	--------------

#### ④世代間交流プログラム

多世代の住民が体験活動を通じて交流することで地域のつながりにつながるよう、場づくりのサポートを行いました。

#### 2016/8/10「世代間交流事業」

主催：七ヶ浜町社会福祉協議会  
協力：東北学院大学災害ボランティアステーション、C4C  
参加者：町内にお住まいの関心のある方（小学生以上）  
会場：七ヶ浜町中央公民館

内容：災害食の調理・試食、防災ゲーム（東北学院大学災害ボランティアステーション学生ボランティアが指導）

※C4Cは学生ボランティアのプログラム開発サポートを担当

#### ⑤福祉・防災学習担い手育成プログラム

社会福祉協議会職員や地域住民等を対象とした研修において、講義・ワーク・事例提供を行いました。

##### 2016/7/6「福祉・防災学習サポーター養成講座①」

主催：柴田町社会福祉協議会

協力：C4C

参加者：町内の関心のある方 18 人

会場：柴田町地域福祉センター

内容：福祉学習・防災学習について、防災食育ゲームの体験



##### 2017/2/1「第二回福祉教育学習会」

主催：宮城県社会福祉協議会

講師：角田市社会福祉協議会、柴田町社会福祉協議会、C4C

参加者：県内社会福祉協議会職員 19 人

会場：宮城県管工事会館

内容：プログラム点検、県内実践事例紹介

##### 2017/3/3「第三回福祉教育学習会」

主催：宮城県社会福祉協議会

講師：C4C

参加者：県内社会福祉協議会職員 22 人

会場：エスポールみやぎ

内容：プログラム評価方法検討、県内実践事例紹介

#### ⑥メンタルヘルス学習プログラム

15 年度に作成した「こころの健康について学ぶワークブック」を使用したワークショップや研修会を開催しました。

主体：みやぎこころのデザイン教育実行委員会（C4C菅原が委員として参画）

委員会出席：2016/7/20、9/30、11/25、12/13、2017/3/24、4/5、5/12

研修開催：2017/2/4「これからの学校メンタルヘルス教育セミナー」



### 3、福祉・防災学習推進のためのネットワーク構築

県内外で開催された会議への出席・研修への参加・事業の視察や、個別の情報交換・ヒアリング・相談対応を行い、福祉・防災学習にかかわる情報収集・提供、ネットワーク構築に取り組みました。

#### 会議への出席

2016/8/11～15 コミュニティ・4・チルドレンのタイキャンプに参加

2017/5/23 障がいのある子どもや親子の防災力向上に向けた情報交換会を開催

2016/6/1、8/3、9/7、10/12、12/14、2017/1/18、2/8、3/8、4/12、5/12 「みやぎ広域支援団体担当者連携会議」

2016/7/25 大河原町社会福祉協議会「町内の小学校・中学校・高等学校の防災担当者会議」

2017/2/22、2017/5/10 宮城県社会福祉協議会「震災復興支援定例会議」

#### 研修への参加

2016/6/12 地底の森ミュージアム「たのしい地底の森教室『災害と考古学』」

2016/6/13 石巻市社会福祉協議会「福祉教育推進研修会」

2016/6/29 岩沼市社会福祉協議会「福祉教育実践発表・研究会」

2016/9/24 河北新報社「子育て孫育て応援セミナー」

2016/9/25 大崎市社会福祉協議会古川支所「ふくし防災のつどい」

2016/9/27 仙台市「食物アレルギー講演会」

2016/10/15 日本ファンドレイジング協会「準認定ファンドレイザー必修研修」

2016/11/2 日本ファンドレイジング協会研修「幅広い支援を得るための必要な社会的インパクト評価とは」

2016/11/24 宮城県教育委員会「防災教育を中心とした学校安全フォーラム」（展示発表・参加）

2017/1/19 宮城県教育委員会「地域防災フォーラム」

2017/1/24 角田市社会福祉協議会「地域福祉フォーラム」

2017/3/16 認定NPO法人Switch「社会的インパクト評価最終報告会 in 仙台」

2017/5/13 日本ファンドレイジング協会東北チャプター「ファンドレイジング日本2017 振り返り共有会」「東北チャプター総会」

#### 事業の視察

2016/8/23 のびすく宮城野「防災教室」

2016/8/26 「震災対策技術展 東北」

2016/8/28 仙台市「せんだい防災のひろば」

#### 情報交換・ヒアリング（順不同）

県内：宮城県社会福祉協議会、石巻市社会福祉協議会、岩沼市社会福祉協議会、登米市社会福祉協議会、名取市社会福祉協議会、NPO法人仙台市精神保健福祉団体連絡協議会、みやぎ生協ボランティアセンター、石巻市立雄勝小学校

県外：コミュニティ・エンパワメント・オフィス FEEL Do、NPO法人み・らいず、人と防災未来センター、山形県立高島高校

#### 4、普及啓発のための情報発信

宮城における福祉・防災学習の取り組み状況を発信しながら、普及啓発をはかる機会として、下記の企画や研修会において事例報告や講師をつとめました。

また、C4Cみやぎのリーフレットをリニューアルし500部作成・配布しました。

全国社会福祉協議会「ボランティア情報」2016年10月号に掲載

2016/12/9「平成28年度 市町村社協連合会泉州ブロック研修会」（大阪府阪南市）

2016/12/10～11 わかやまNPOセンター「親子で参加！たのしく防災を学ぼう！」（和歌山県田辺市・和歌山市）

2017/1/14 愛媛県社会福祉協議会「住民参加による防災推進研修会」（愛媛県松山市）（再掲）

2017/1/15 西予市社会福祉協議会「防災推進研修会」（愛媛県西予市）（再掲）

2017/1/17 みやぎ心のケアセンター「心のケア交流会」（宮城県仙台市）

2017/3/14 鳥取県社会福祉協議会「福祉教育推進セミナー」（鳥取県倉吉市）

2017/5/19 名護市社会福祉協議会「災害ボランティアセンター設置・運営訓練」（沖縄県名護市）

2017/5/24 大阪府社会福祉協議会「ボランティアセンター担当者会議」（大阪府大阪市）

#### 【成果と課題】

2016年度は、単発の事業への講師対応から、中長期的なプログラム開発やモデル地域における事業実施への参画が増え、福祉・防災学習の推進に向けた基盤の深まりと可能性の広がりを感じた一年でした。

- 自主事業「わたしたちの災害食」プロジェクトでは、引き続き宮城学院女子大学学生ボランティアサークル Food and Smile! と連携。県内3か所・県外2か所において事業を実施した中で、親子向けに実践する際の工夫・配慮や地域による食文化の違いなどを知ることができました。また、仙台市内において活動報告会を開催した際は16人の方にご参加いただき、食を通じた防災活動への関心の高さや様々な事業実施の可能性を知ることができました。Food and Smile! としても助成金を申請・活用し事業を展開するなど、学生の主体性が高まり、活動の継続性・発展性をより一層感じられた一年でした。
- 自主事業「学びと暮らしへの安心感を高める防災学習」推進プロジェクトでは、防災学習勉強会を開催。6回の開催で、県内外の社会福祉協議会職員、NPO職員、学校教員など延べ77人の方にご参加いただきました。学習者のところに配慮した防災学習実践への関心の高さ、参加者の立場になってプログラムを体験してみる大切さ、模擬授業などを通じて互いに高め合うことの重要さなどが確認できました。参加者のみなさんやゲストにお迎えしたみなさんと学び合いの時間を過ごしながら、より深く広いネットワークの構築にもつなげることができました。親子向け防災ハンドブックの作成については、新しいスタイルの防災学習教材として、様々な方から期待の声をいただいています。

- モデル事業の実施においては、6 パターンのプログラムの実践支援に取り組みました。単発の事業への協力と数年単位の中長期的な事業への参画とで、目標設定やペース配分のしかた、協力者・関係機関等との連携のありかた、地元主催団体との役割分担のもちかたなどで違いを感じた一年でした。
- ネットワーク構築においては、会議への出席や研修への参加等の中で、支援学校で防災学習に取り組む教員から実践事例をお聞きすることができました。一方で、防災学習に活用できる教材やプログラムの不足、保護者も含めた防災学習実施の必要性、地域との連携のありかたなど、様々な課題があることもお聞きしました。

こうした取り組みから、

- ・未就学児や障がい児およびその保護者といった、福祉・防災学習への動機づけやその機会が比較的に少ない層へのアプローチ方法の検討が必要であること
  - ・防災学習勉強会を開催したことから、福祉学習をテーマとした勉強会へのニーズが高まっていること
  - ・中長期的なプログラム開発や実践活動へのサポートニーズがあること
- といった現状・課題・変化を感じたため、2017 年度の事業にも活かしていきたいと考えています。

## 2. 視察・研修・ワークショップ

### 2-1. スタディツアー、国際交流事業

#### (1) NPO 法人み・らいず フィリピン・スタディツアー

2016 年 9 月 5 日～11 日（6 泊 7 日）、NPO 法人み・らいずと C4C の共同企画で大学生向けのスタディツアーを実施しました。参加者は、大学生 7 人、み・らいず職員 3 人、C4C 代表理事・栗原の計 10 人で、事前研修を行い、参加者各人の目標設定をして臨みました。現地では、JPCOM-CARES の調整の元、STAC5 見学、カバヤン町のしょうがい児宅でのホームステイ、ハッピーハロー村メンバーとビーズのアクセサリ作成、家庭訪問などに参加しました。最初は言葉の壁にぶつかり、現地



の方々となかなかコミュニケーションが取れませんでした。時間が経つにつれて積極的にコミュニケーションを取り、フィリピンの山間部で暮らすしょうがい児者や家族の抱える思いについてたくさん知ることができました。福祉制度のまだまだ整っていない地域だからこそ、家族のつながり、地域のつながりの中で支え合って暮らす幸せを参加した学生は感じ取っていたようです。フィリピンでの経験を今後の福祉の仕事に活かして行って貰えればと思います。

## (2) NTT 労組関西総支部タイ・ワークキャンプ

2017年2月22日～28日(6泊7日)、NTT労働組合関西総支部が国際ボランティア活動として、『タイ東北地方農村ワークキャンプ』を実施し、KK財団とC4Cが調整を行いました。組合員11人、大学生通訳4人が、コンケン県ノンメック村でホームステイし、村人たちと協働で、放課後や週末の子どもの居場所としてまた図書室などに使用できる多目的コミュニティセンター(ノンメック村日タイ交流センター)を建設しました。村人たちは、ペンキを塗ったりコンクリートや土を均して汗を流しながら働く日本人を暖かく迎え入れてくれ、女性たちによる踊りや村の青年による伝統音楽演奏、運動会などの歓迎・送別会を開催してくれました。コミュニティセンターの図書室へ、NTT労組関西総支部とサワディープロジェクト(箕面市でタイへ絵本の寄付活動をしている団体)から絵本の寄贈があり、ノンメック村村長に贈呈しました。



NTT労組関西総支部とは、2014年のスタディツアー、2015年稲刈りなどの農作業の手伝いを行ったスタディツアー、2016年2月にノンメック村にスポーツコートを建設するワークキャンプを行ってきました。これまでの村への支援と今回のワークを通じてNTT労組関西総支部とワーク参加者に対する信頼は強く、今後も交流を続けていきたいという村人たちの言葉で無事ワークを終えました。

## (3) こども(青少年)キャンプINタイ

2016年8月11日～16日(5泊6日)、タイのコンケンのキャンプ場で国際こども(青少年)キャンプを開催しました。目的は本法人設立5周年を機に、各国(カンボジアKCD、フィリピンJPCOM-CARES、タイKK財団、日本C4C)のスタッフの間で、C4Cの目的やビジョンを共有・確認するし交流を深めることと、C4Cが支援する子どもたちの交流です。日本からは、IDoCafeやスタ



ディツアー等の事業で以前より交流のある神戸フリースクールの子どもたちが参加しました。現地で手伝ってくれたタイ人ボランティアを含めると総勢50人もの参加があり、自分の夢や地域での活動を発表したり、一緒に料理を作ったり、遊んだり短い期間でしたが密度の濃いキャンプとなりました。

最初は言葉もわからないので戸惑いもありましたが、子どもたち同士で直接コミュニケーションをとることで、何かが生まれる場になったようでした。言葉、文化、そして直面する問題はそれぞれ異なるけれど、一人ぼっちではないことを確認した参加者もいました。また最終日には、ノーンメック村でホームステイをし、実験農場で田植えをしました。多くの参加者にとって初めての田植え体験だったようです。今後もこのような子どもの国際交流を不定期に継続させていく予定です。

## 2-2. 国内 IDoCafe(あい・ドゥ・カフェ)事業

2016年度は、諸事情により開催しませんでした。2017年度の開催方法を検討します。

## 3. パートナーシップ推進事業

### 3-1. 調査事業

#### (1) 宮城県における地域一体で取り組む福祉・防災学習推進事業のための調査

調査実施者：Human Being 菅原清香会員

宮城県および周辺県において福祉・防災学習推進事業の実施主体を訪問し、ヒアリング調査・研究、事業実施に関する意見交換等を行いました。

特に、

- ・ 未就学児や障がいのある子どもやその保護者といった、日頃防災について考える機会の少ない方々へどのようにアプローチをしていくか、検討の重要性を感じたため、学習ツールの作成や県内外の支援団体等へのヒアリングを開始しました。
- ・ 防災学習勉強会の開催によって福祉学習を取り上げる勉強会の開催要望をいただいたため、2017年に計画していきたいと考えています。
- ・ 単発の研修依頼から中長期的な学習プログラム開発・モデル事業実施のご相談をいただくことが増えたため、より一層のスキルアップや実施主体へのアプローチ方法の検討をはかしていきたいと考えています。

#### (2) カンボジアにおける新しい活動地域の事前調査

KCDが2017年10月から3年計画で進めようとしている新しい活動対象地域の視察を2017年3月、代表理事・栗原(3月15～20日)、副代表・加藤(3月6日から20日)が、KCDスタッフとともに視察しました。

新しい活動地域は、カンダール県コートム郡カンボンコ行政区、ラデック行政区、チュヘルクマー行政区、ソムポポン行政区、プレイベン県パームロー郡パームロー行政区、スベイリエン県スベイリエン郡コートラベック行政区で、地域の状況把握や住民へのヒアリングを行いました。



共通する問題点は、就学率の低さ、ベトナム系住民の住民票の問題、ドラッグの蔓延、DV、医療サービスの不足、農業収入の低さ、出稼ぎの多さでした。地域によっては、中学校が遠すぎて通えないため、小学校に7年以上学ぶ子どもがいたり、国境沿いにあるカジノの寄付で図書室は建てたが本はない学校もありました。またベトナム国境に新たにできた中国系資本の工場に多くの大人たちが働きに出ているため、子どもの世話をする者がいないところもあり、生業の変化のしわ寄せは子どもたちの日常生活に影響しています。

カンボジアにおける子どもとコミュニティの問題は山積みですが、C4Cは今後もKCDと、安心して子どもが育つことができるコミュニティを支えるため協働していきます。

## 4. 情報提供事業

### 4-1. ホームページ、ブログ、Facebookによる情報発信

2016年6月～2017年5月末の間に、1,211人の方に訪問いただき、3,366のプレビューがありました。各国の事業内容も少しずつ変化・発展しているため、今後段階的にホームページのリニューアルを行い、情報を充実していきます。新鮮な現地情報や活動報告を、ブログとfacebookなどSNSを活用した情報発信に努めます。

★ホームページ：<http://www.community4children.com>

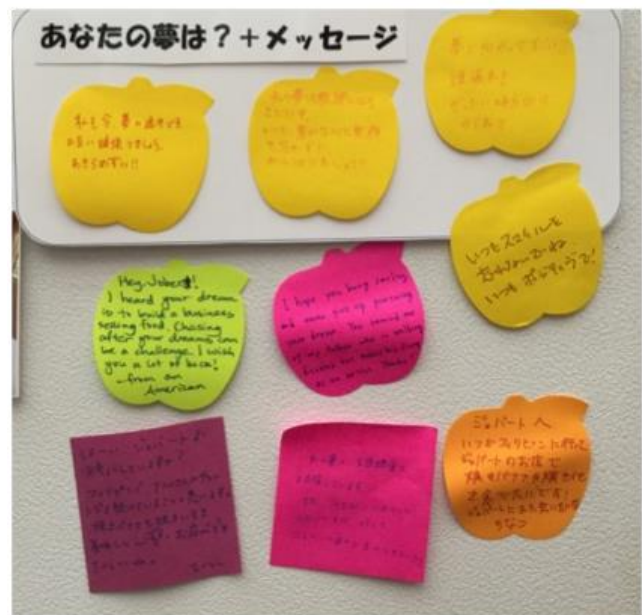
★ブログ：<http://ameblo.jp/community4children/>

### 4-2. イベント参加

◆ワン・ワールド・フェスティバル for Youth～高校生のための国際交流・国際協力 Expo への出展  
2016年12月23日（土）10時～17時 於 大阪国際交流センター

テーマ「見方が変わる！世界も変えちゃう！」 主に中・高校生や大学生など約6,000人が来場

コミュニティ・4・チルドレンは、活動紹介ブースを出展しました。フィリピンのJobertさんの暮らしや夢、チャレンジしている商売のことなどの紹介とC4Cや現地団体の支援内容を紹介する形で



展示しました。国が違っても、夢に向かって生きている同世代を身近に感じてもらえるように、来場者には、Jobert さん紹介ボードを見た感想を書くメッセージを募りました。このメッセージは、英訳し Jobert さん本人に届けました。本会のブース運営には、2016 年 8 月の青少年キャンプ IN タイに参加したメンバーが協力してくれました。

## 5. 組織運営

### ◆2016 年度会員について

#### 会員数比較

	2014 年度(人)	2015 年度(人)	2016 年度(人) (2017 年 5 月 31 日現在)
正会員(個人)	14	21	14
正会員(団体)	1	0	1
賛助会員(個人)	8	13	9
賛助会員(団体)	0	2	2
使途指定寄付(タイ牛銀行)	2	14	3
使途指定寄付(タイ奨学金)	1	0	0
使途指定寄付(フィリピン奨学金)	1	0	2
一般寄付	11	12	5

会員総数は、正会員と賛助会員を合わせて 26 人と、正会員が 2015 年度より 7 人、賛助会員も 4 人減数となっています。自主事業のスタディツアーや国内事業 IDoCafe などを行わなかったため、会員であった方々に対するフォローが不十分だったことが大きな要素と考えられます。

また 2015 年度はタイの牛銀行支援キャンペーンを行ったため使途指定寄付が増えましたが、2016 年度は牛の口蹄疫感染の恐れがあったため、牛の購入を一時停止し、寄付募集も休止したため寄付をアピールすることが出来ませんでした。

タイの牛銀行の状況を見て、追加キャンペーンの有無や時期等を決定します。

今後は、現地の支援団体の facebook 公式ページを通じたタイムリーな情報発信を行うことや支援者の方々も参加できる事業企画や現地訪問ツアーや会員や関心のある方々の交流の場を持ち新規会員の募集や会員継続に至る活動を行います。

